

## ペシミストのハッピーエンド小説

— フェルディナント・フォン・ザール『碎石夫』について —

小 谷 一 夫

Happyend-Novelle des Pessimisten

— „Die Steinklopfer“ von Ferdinand von Saar —

Kazuo KOTANI

### Zusammenfassung

Ferdinand von Saars „Die Steinklopfer“ (1874) ist zwar die bekannteste seiner Novellen, darüber hinaus nimmt sie in seinem Werk eine Sonderstellung ein, insofern, als man bei diesem pessimistischen Dichter sonst kaum einen derartig guten Novellenschluss, ein Happyend, finden kann. Die Geschichte ist von einigen Wechseln der Positionen bzw. Rollen der Personen gekennzeichnet. Sie zeigen sich sowohl im Verhältnis zwischen Georg und dem Aufseher, als auch im Verhältnis zwischen Georg und Tertschka. Diese Wendungen in der Figurenkonstellation bestimmen die Struktur der Erzählung. Erzähltechnisch übt die Novelle eine kathartische Wirkung auf ihre Leser aus, die durch die folgenden Handlungen der Personen erzielt wird: Aufstand der Unterdrückten, leidenschaftliche Tat der Liebenden und Warmherzigkeit der Männer, die den Liebenden Hilfe leisten. Saar stellte der ersten Ausgabe der Novelle eine Widmung an seine Gönnerin, Frau Josephine von Wertheimstein, voran. Wenn man das Verständnis des Obersten, das den glücklichen Novellenausgang ermöglicht, und die Widmung des Dichters zusammen in Erwägung zieht, wird es klar, warum hier Saar eine Erzählung mit einem Happyend geschrieben hat. Mit der Novelle wollte er nämlich seine Verehrung für die Wohltätigkeit seiner Schutzherrin und seinen Dank für ihre persönliche Unterstützung zum Ausdruck bringen.

Schlüsselwörter : Ferdinand von Saar, „Die Steinklopfer“, Semmeringbahn, Josephine von Wertheimstein

### I.

オーストリア文学史においては、近年、オーストリアにおける「モデルネ文学の先駆者」<sup>1)</sup> という評価が定着しつつある作家フェルディナント・フォン・ザールであるが、現代の一般読者にとって、その名はけっして馴染みのあるものとは言えない。そんな中で、長年レクラム文庫にも収められ、比較的よく知られているザールの作品に、『碎石夫』(„Die Steinklopfer“) (1874) という短編小説がある。鉄道建設現場の現場監督と彼の養女テルチュカ、そして、働き口を求めてそこにやって来たゲオルクという三者の間に展開する前半の物語とゲオルクが殺人の容疑で軍法会議にかけられる後半の物語より成るこの小説は、一般にショーペンハウアーの哲学などにもつながるペシミズムをその特徴とするザール文学の中

にあって、一応は幸福な結末を迎えるという点で、きわめて例外的かつ特異な作品でもある。本稿の目的は、『碎石夫』がいかなる小説的特徴を有する作品であるのかを明らかにすること、と同時に、いわば「非ザールの」とも言えるこの小説に込められたその意味を探ることである。

### II.

作品前半の舞台となっているゼメルング(Semmering)は、オーストリアの下オーストリア州とシュタイアマルク州の間に位置する山岳地帯である。この辺りはアルプス山脈の東端にあたり、作品で言及されるゾンヴェントシュタイン(Sonnwendstein)は標高1523mのゼメルングを代表する山である。切り立った岩

山、針葉樹の森、幅の広い尾根と谷等々、ゼメリングは豊かで変化に富んだ自然に囲まれた景勝地である。清澄な山の空気と魅力あふれるその自然によって、19世紀後半から第2次世界大戦前まで、ゼメリングはウィーンからも比較的近い保養地の一つとして大いに賑わった。そして、こうした人気の高山保養地という地位をこの地にもたらしたのもこそ、ゼメリング鉄道の建設だったのである。

下オーストリア州とシュタイアマルク州を結ぶ交通の要衝であったゼメリングには、12世紀にはすでにロバなどを使って荷を運ぶことのできる峠道があったと云う。1728年、皇帝カール6世によりゼメリング道が建設され、さらに、その拡幅工事が皇帝フェルディナント1世治下の1841年に行われた。作品の中に登場するショットヴィーン (Schottwien) は、下オーストリア側の谷あいにある集落で、ゼメリング峠を往来する人々の宿場として栄えた。また、物語の中で重要な役割を担っているマリア・シュッツ (Maria Schutz) 教会もゾンヴェントシュタイン山麓に実在する巡礼教会である。17世紀後半、ペスト禍がショットヴィーンを襲ったとき、多数のペスト患者が聖なる泉のあったこの山麓にやって来て、死の病を癒すことができた。ショットヴィーンの人々は、聖母マリアへの感謝の念を表わすべく、そこに教会堂を建立し、それがマリア・シュッツ巡礼教会となったのである。さらに、作中に登場するクラム城址、オッタータールといった他の場所も、ゼメリングないしその周辺に実在するものである。

小説の冒頭に次のような語り手の言葉がある。

今ではもうそれほど強烈な印象を与えることもないが、ひと昔前、大きく口を開けた深い谷と険しい岩壁に沿って九十九折りに上ってゆくゼメリング越えの鉄道に初めて乗った人は、列車が轟音とともに目も眩むような高架橋を渡ったり、突然鋭い警笛を鳴らしながら果てしなく続くように思われるトンネルの闇の中へと突き進んでゆくとき、身が引き締まるような恐怖感と、それまで不可能と思っていたことが現実となって眼前にあるのを見るとき必ず抱くあの感嘆の念とが入り交じった気持ちになったことであろう。そして、車両を連結した列車が徐々に平地に近づきながら、再び何事もなくのどかな放牧地の間を快走してゆくとき、そのとき人は、このような驚嘆すべき事業を成し得る今の世紀の息子である自分を誇らしく思いながら、座席の背にもたれたことだろう。(S.87)

19世紀、ヨーロッパ各国では鉄道の建設が盛んに行わ

れていた。ハプスブルク帝国でも広大な版図を結ぶ鉄道網の確立に力が注がれていた。なかでも帝都ウィーンから地中海沿岸の港湾都市トリエスト (現イタリア領) までを結ぶ南鉄道 (Südbahn) の建設は重要な国家的プロジェクトであった。工事は1839年に開始され、1842年、まずウィーンから下オーストリア州のグロックニッツまでが開通した。その後、シュタイアマルク州のミュルツツーシュラーク以南の路線は順調に工事が進められたが、グロックニッツからミュルツツーシュラークまでの区間は、間に横たわるゼメリング峠のため、長い間未着工の状態であった。そして、この最難区間の鉄道建設がやっと開始されたのは、1848年になってからのことであった。全長約42km、高低差約450m (最高地点の海拔は898m) というこのゼメリング鉄道 (Semmeringbahn) 建設の任に当たったのが、ヴェネツィア生まれのオーストリア人技師カール・リッター・フォン・ゲーガ (Karl Ritter von Ghega, 1802-1860) である。彼が最終的に選定した峠越えのルートは、16の高架橋と15のトンネル (最長1430m) を含むものであった。工事用の機械も、ダイナマイトもまだなかった当時、じつに多数の労働者がこの大工事に駆り出された。その数は最大時約2万人にも達したと云う。小説との関連性を考える上で興味深いのは、ゲーガが鉄材の代わりに大量のレンガと石材を使う工法を採用したことである。また、6年にわたった工事期間中には少なからぬ数の犠牲者が出た。なかには、土砂の崩落といった事故によるものももちろんあるが、それ以上に多かったのが、伝染病のコレラやチフスに罹って命を落とす者たちであった。例えば、1850年から1852年の間にコレラとチフスで死んだ作業員の数は750名を越えたと言われている。このような困難な工事の末、ついに1854年、ヨーロッパ最初の山岳鉄道であるゼメリング鉄道は完成し、さらに、1857年には南鉄道全線が開通したのである。そして、1998年、世界の鉄道施設の中で初めて、ゼメリング鉄道はユネスコの世界文化遺産に登録された。

作品後半の舞台は、ゼメリングから北東に約40km離れたヴィーナー・ノイシュタット (Wiener Neustadt) である。ウィーンの南約50kmに位置するヴィーナー・ノイシュタットは12世紀末にバーベンベルク家のレーオポルト5世の命により建設された町である。15世紀、ハプスブルク家の皇帝フリードリヒ3世がこの地に宮廷を構えたことで町は大いに栄えた。物語では主人公がここで軍法会議にかけられることになるわけだが、ヴィーナー・ノイシュタットは歴史的に軍事的性格の強い町であった。なぜなら、この町はハンガリーやオスマン・トルコといった東からの脅威に対して作られた防衛上の拠点だったか

らである。さらに、18世紀半ばには女帝マリア・テレジアによってオーストリア最初の士官学校がここにつくられるなど、オーストリア陸軍にとってヴィーナー・ノイシュタットは重要な駐屯地の一つとなっていたのである。

### Ⅲ.

#### (1) 現場監督

現場監督 (Aufseher) は、年齢およそ50歳、「ヘラクレスのような体格の男」(S.90)である。男は、彼の下に配属された労働者たちとともに工事現場近くの作業小屋に寝泊りしながら、ゼメリング鉄道の建設に携わっている。しかし、作業現場の監督が本来の職務内容であるにもかかわらず、彼はまったくと言っていいほどその任務を果たしていない。

「あいつは、工事のことなんて、ほとんど関心ないのよ。成り行きまかせのほったらかしよ。ほんとに時たま見回りに来るだけで、来たと思ったら、毒づいたり、がみがみ言うだけ。」(S.97)

現場監督には、今まさに自分たちが世紀の大事業に参画しているのだという使命感も、また、そこから生まれる責任感もまるでない。彼の頭の中にあるのは私利私欲を満たすことだけ、その地位を利用して私腹を肥やすことだけである。労働者たちが毎日の辛い肉体作業によってやっと手にした金を、いかに彼らからまきあげることができるか、それが彼の最大の関心事である。彼はまず工事事務所に掛け合って、労働者たちが食事をはじめ、自分たちの生活に必要な物をすべて彼から購入しなければならない、という決まりを認めさせたのであった。そのうえで、食事には肉屋から格安で仕入れた傷んだ肉を使用したり、高い値段で品物売りつけて、暴利を貪っていた。しかし、彼の強欲さは止まるところを知らない。掛売りした場合には価格を倍にし、彼から前借りしている連中には一緒に酒を飲んだり、賭けトランプをすることを強要するなど、まさに手段を選ばず、哀れな労働者たちから金を搾り取ることを考えているのである (S.97f.)。

このように情け容赦なく吸い上げた金で、現場監督は一人、良い暮らしをしている。労働者たちの口に入るものといえば、かび臭いそば粉 (S.98)、傷んだ豚肉 (S.97)、そして、安酒である火酒 (S.100) ぐらいであるのに対し、彼だけは、美味しい鶏肉を食べ、ワインを飲んでいる (S.100)、という具合である。小説においてザールは、他の労働者たちとともに現場監督が登場する

最初の場合で、すでにこのような状況を暗示的に示している。

そうして、ひどい身なりをした男たちの一団が近づいてきた。真ん中には、他の連中よりも良い服装をした、ヘラクレスのような体格の男が、周りの男たちを見下ろすように歩いていた。男は50歳ぐらいであったろう。横幅の広い、むくんだその顔は、ワインのせいで真っ赤であった。(S.90)

今は現場監督をしているこの男も、その昔はただの池掘り人夫であった (S.96)。いかなる手段を使って、あるいは、いかなる幸運に恵まれて、男が現場監督にまで出世できたのか、物語はいっさい語っていないが、その我利我利亡者ぶりからして、およそまともな方法ではなかったに違いない、と考えるのが自然であろう。こうしてともかくも出世し、現在の地位を得た彼は、たとえそれがいかにささやかなものであっても、周りの人間が幸せをつかむのは断じて我慢がならない。

「あいつは悪党よ。」彼女は最後に言った。「あいつは他人が幸せになるのを見てられないの。だから、相手が誰であろうが、人が大切にしているものを取り上げて満足してるのよ。」(S.103)

指図・監督される側から指図・監督する側へ、搾取される側から搾取する側へと昇進した現場監督には、元同僚である労働者たちに対する同情の念は微塵もない。人里離れた山の上の建設工事現場という限られた世界の中で、彼はまさに絶対的ともいえる権力を握り、小さな支配者として君臨し、「労働者の汗と血で私腹を肥やしている」(S.116) のであった。

#### (2) テルチュカ

彼女は裸足で、後頭部に粗い布地の黒っぽいスカーフを巻いていた。そこから覗いている顔は皮膚が萎び、また、色白の顔が日焼けするとよくそうなるように、顔色は褐色がかった、褪せた色をしていた。額には深いしわが刻まれ、口もとには索漠たる哀しみの表情が浮かんでいた。それは、座っている彼女の印象を年齢よりも老けたものにする一方で、発育不全の少女のような体つきを妙に際立たせていた。(S.89)

これは、物語の冒頭、作業小屋の前で繕い物をしているテルチュカの様子を描いた部分であるが、ここにはす

で、彼女が苦しみに満ちた過酷な日々を送っていることが示唆されている。ボヘミアで生まれた彼女は、事故で実の父親を失った。その後、母親が現場監督と一緒に、工事現場を転々とする生活を送ってきた。現場監督はすぐに暴力を振るう粗暴な男で、母親が死んだのも男に胸を強く殴打されたのが原因だとテルチュカは考えている(S.96)。

前述の通り、労働者たちの仕事ぶりを監視、監督するだけでなく、生活の隅々に至るまで彼らを支配している現場監督であるが、その彼が自身の支配欲をもっとも満足させられる対象となっているのがテルチュカである。現場監督はテルチュカの養父である。しかし、この「父親」は「娘」のことを、まさに自分が好きなようにこき使うことができる存在としか考えていない。昔話の「灰かぶり」さながらに、小屋の隅のかまどの脇を寝床にしている(S.92)テルチュカは、他の労働者たちと同じように、建設工事に従事し、石割りという重労働をさせられている。そのうえ、昼休みには皿洗い(S.100)、休日には針仕事(S.89ff.)など、他の作業員たちが休息を取っているときも、彼女だけは現場監督の世話をさせられているのである。彼がいかに貪欲な人間で、テルチュカがいかに奴隷のような扱いを受けてきたのか、彼女自身の言葉を引用しよう。

「だから、わたしはかまどの残り物で我慢しくっちゃいけないの。それに、さっきも言ったけど、あいつはわたしの賃金を横取りするし、かあさんがわたしに遺してくれた40グルデンの銀貨まで猫糞するのよ。そんなのは、どれもまだましな方だって思うかもしれないけど、でも、あいつはまた底意地も悪い男で、わたしのこと、しょっちゅうぶつんだから。」(S.96)

満身に食事も与えられず、有り金はすべて巻き上げられ、少しでも気に入らないことがあるとすぐに暴力を振るう。まことにやりたい放題である。しかし、いかに物理的にテルチュカを支配していたとしても、彼女の心の中までは支配できないことを物語は示している。

「お昼からずっとこれにかかりつきりよ。でも、裁縫を習ったことのある人みたいには、はやくできないわ。」この言葉の端々に感じられる控えめな非難の響き、それがさらに彼の神経を逆なでしたようだった。「おまえってやつは、いつも、なんだかんだと口答える！」と彼は声を荒らげた。(S.91)

「彼は熱があるのよ。脂っこい肉は体に良くないんじゃ

ない。」とテルチュカが身を乗り出してきて言った。なぜなら、彼女は、この有無を言わせぬ強引さに対して、気弱なゲオルクの後押しが必要だと感じたからである。「黙れ！」と男は怒鳴った。「何がこの男の体にいいのか、悪いのか、いったい誰が言ったんだ？ 関係ないことに、おまえは口出しするな！」(S.99f.)

ここには、現場監督の言動に対し、直接的、あるいは、間接的に異を唱え、彼女なりに自己主張を試みるテルチュカの姿がある。また、テルチュカは自分自身の信条に基づいて、時にははっきり養父と異なる行動を取っている。たとえば、自らの信仰心に関わる場合がそれである。

「明日、わたし、ショットヴィーンまで下りて、教会に行くわ。」と彼女は答えた。「あいつはもちろん気に食わないだろうけど。だって、あいつは神様を信じちゃいないから。[...]でも、わたし、明日は行くわよ。たとえ、あいつから、どんな仕打ちを受けたって。わたし、酒と賭けトランプのことしか頭にない連中のなかで、すっかりお祈りを忘れてしまいたくはないの。」(S.103)

さらに、もう一つ、テルチュカが終始一貫養父の意に逆らう態度を取り続けた事柄がある。これまで誰にも話したことの無いその出来事を、彼女はゲオルクに打ち明ける。

「これまで、あなたに黙ってたけど。」顔を真っ赤に染めながら、しばらく口をつぐんでいた彼女がこう続けた。「でも、こうなったら、話さないわけにはいかないわ。かあさんがまだ生きていた頃、もうあの頃からあいつはしつこくわたしに言い寄ってきていたの。で、わたしはあいつを避け、かあさんに言いつけるよ、って脅したりしていたの。でも、去年の夏のある晩、あいつが居酒屋からひとりで帰ってくると、また例の調子で、おれと一緒ににならないか、って言うの。こっちがまったく聴く素振りも見せないでいると、あいつは力づくでわたしをものにしようとしたわ。でも、わたしは抵抗し、あいつのことどう思っているか、言ってやったわ。それ以来、あいつは心の底からわたしのことを憎み、なりふり構わず仕返ししてくるの。」(S.112)

執拗にテルチュカを口説き、しまいには力づくで彼女を自分のものにしようとした現場監督に対して、テルチュカは常に断固たる拒絶の姿勢を貫き通したのであった。

### (3) ゲオルク

彼女が顔を上げると、線路の方から男が一人小屋に向かって近づいてくるのが見えた。見るからに惨めな姿をした男だった。体つきは小さく貧相で、擦り切れた古い軍服を着ていた。服は、男の体には丈も幅も大きすぎて、可笑しいほどだぶだぶだった。また、頭には青い年季の入った戦闘帽を目深にかぶっていた。男は節くれだった木の枝で体を支えていた。また、肩から擦り切れた厚手の小さな布袋を下げていたが、物はあまり入っていないように見えた。にもかかわらず、その足取りはよろよろしていた。そして、男は、どんよりした生気のない目でおずおずとためらいがちに前を見ながら、興味深げに見つめている彼女の方へ近づいてきた。(S.89)

これは、ゲオルクが初めて建設工事現場にやって来たときの様子を描いた部分だが、すでにここにはゲオルクという人物の特徴が余すところなく表現されている。一言で言えば、彼は「惨めな」男である。第一に、彼は体格が貧弱で（「体つきは小さく貧相で」）、ひ弱な（「木の枝で体を支えていた」、「その足取りはよろよろしていた」）人物である。ゲオルクが小柄な男であることは、他の箇所においても言及される。

がっしりとした体つきの現場監督が、ずいとい小柄な男の前に歩み出た。(S.91)

「ああ、昨日のちびか！」と彼は叫んだ。(S.99)

また、脆弱さについても同様である。

可哀想なほど青白く、痩せこけた、ひげの薄いその顔(S.90)

彼の弱々しい姿(S.90)

そこで、彼は疲労の色をにじませながら、草の中に腰を下ろした。(S.90)

彼が弱々しい姿をしているのは、確かに一つには、戦場でうつされた熱病からまだ完全に癒えていないからではあるが(S.91)、しかし、もともと虚弱な体質であったことを彼自身が語っている。

「それで、俺は村の中でガチョウの番をしたり、次に

は、牛の番をしたりしなくちゃならなかった。十八になるまで。なぜって、小さい時から力が弱かったんで、どこの農家も作男に雇ってくれなかったんだ。」(S.94)

第二に、彼は気弱な性格の男である（「どんよりした生気のない目でおずおずとためらいがちに前を見ながら」）。物語の各処にゲオルクの気の弱さが表れている。

ゲオルクはいつまでも、もじもじと、入るのをためらうかのように、入り口のそばに立ったままだった。(S.92)

彼は不安げに耳を傾けていた。(S.98)

しかし、彼がもっともおどおどした様子を見せるのは、現場監督と相対したときである。

「ゲオルクが」手を震わせながら手渡した紙切れを、彼は薄明かりの中で見ながら、(S.91)

「釣り銭を頂戴したいんですが。」と、つかえながらゲオルクは言った。(S.100)

第三に、彼は身なりもみすばらしく（「擦り切れた古い軍服」、「可笑しいほどだぶだぶだった」、「青い年季の入った戦闘帽」）、貧しい生活を送っていることがうかがわれる（「肩から擦り切れた厚手の小さな布袋を下げていたが、物はあまり入っていないように見えた」）。実際、彼はまさに食うや食わずの生活をしているのであった。

「このところ、ほんとにお手上げでね、昨日の朝から何一つ口にしていなんだ。」(S.95)

「もう長いこと、肉なんて口にすることがないなあ。」としみじみ彼は言った。(S.97)

こうして、ゲオルクは、肉体的にも、精神的にも、そして、物質的にも、情けないまでに惨めな存在として、まずは描かれているのである。

## IV.

物語は、プロット上、現場監督がゲオルクによって殺される第3章までを前半部、それ以降を後半部と見做すことができるだろう。プロット前半の推進役を果たして

いるのが、ゲオルクとテルチュカとの間で次第に高まっていく恋愛感情と、それに比例する形で強まっていくゲオルクと現場監督の間の緊張関係である。

ゲオルクが初めて作業小屋にやって来たとき、そのあまりにも弱々しい姿に、テルチュカはおもわずこう声をかけている。「疲れてるんなら、しばらくそこに座ってるといいわ。」(S.90)そして、他の労働者たちが誰も彼に注意を払ってくれないなかで、どうしてよいかわからず、入り口で途方に暮れているゲオルクに助け舟を出すのも彼女である。

とうとうテルチュカが彼ののもとにやって来た。「寝なさいよ。」と彼女は言って、この共同宿泊所の中の空いている場所を指さした。(S.92)

翌日になると、彼女は彼を碎石場まで連れて行き、石割りの仕方を手ほどきしてくれる(S.93)。また、彼が空腹だと知るや、自分のパンを分け与え、泉から水まで汲んでくれるのである(S.95)。それだけではない。無一文のゲオルクが労賃のもらえる週末まで何とか食いつなげるようにと、テルチュカは虎の子の蓄えを彼に貸してやるとともに(S.98)、現場監督が食事に出す肉は傷んでいるので食べてはいけなとか(S.97)、一度でも現場監督から借金しようものなら、たちまち彼の餌食になってしまうので、それだけはしてはいけない(S.97f.)といった助言をするのである。こうした彼女の親切さに、ゲオルクは戸惑いながらも喜びを隠せない。

「テルチュカ、どうやってこのお礼をしたらいいんだ？」と彼は声を震わせて言った。「君みたいに、親切に優しくしてくれる人は初めてだ。」(S.99)

何故テルチュカはゲオルクに優しくしてくれたのか。それは、上述の通り、彼の弱々しさがまずは彼女の同情心を喚起したからであろう。と同時に、他の作業員たちとは違う何かを彼の中に感じ取ったからでもある。

「わたし、あそこの連中とは一緒にいたくないの。乱暴で意地の悪いやつばかり。でも、あんたはわたしのところにいていいわ、あんたさえよければね。」(S.93)

周囲の労働者たちは振舞いも荒々しく、まったく粗野な連中であるのに対して、たとえばテルチュカが物を差し出したときに彼が見せるじつに遠慮がちな態度ににじみ出ているように(S.95)、ゲオルクは柔和で、繊細な

神経をもった人間であると言えるだろう。それこそがテルチュカの感じた両者の違いにはかあるまい。さらに、もう一つ、彼女が彼により一層親近感を抱くことになった理由が考えられる。それは、自分たちの置かれた境遇が図らずも似ていることにお互いが気づいたからある。実の父と母はすでに他界しているテルチュカ同様、ゲオルクも早くに両親を亡くした(S.94)。過酷な環境の中で、ともに手に職をつける機会すらなく(S.91、S.94)、片や建設工事現場の女性労働者として、片や家畜番や兵士として(S.101)、二人は辛く厳しい半生を送ってきたのである。

「そんなに親切にしてくれるところをみると、これまでの人生、君もきっと散々辛い目に遭ってきたんだね。」と彼は言った。(S.95)

それでも、ゲオルクがこれまでの人生でどんな苦しみを経験してきたのかは、彼女にも伝わってきた。それで、彼女の方も、暗く単調な自分の人生の中で忘れられない辛く、悲しい出来事を語るのだった。こうして、二人はお互い気づかぬうちに慰め合っていたのである。(S.101)

こうして、テルチュカの同情心は急速に親近感へと形を変え、同時に、ゲオルクにおいても彼女の優しさに対する感謝の念が同じく親近感へと変わっていく。そして、二人は「作業小屋の荒んだ仲間たちの世界」から離れ、「自分たち二人だけの憂いをともにした親密な世界」(S.102)を築き始める。ある日曜日、ゲオルクとテルチュカはこっそりショットヴィーンの教会へ礼拝に出かけ、そこで、二人の関係はさらに新たな一步を踏み出すことになる。初めて二人きりで建設工事現場の外へ出たこの日、ゲオルクはテルチュカに幾つかの贈り物をする。自ら摘んだ花束(S.105)、露店で買ったハート形の胡椒入り菓子と模造真珠の首飾り(S.106)がそれである。いずれの贈り物も、彼女に対する彼の気持ちがすでに親近感を越えた恋情となっていることを示しているが、なかでも、胡椒入り菓子にキューピッドの矢がささったハートの絵が描かれているのは象徴的である。もちろん、贈与行為はごくありきたりの愛情表現の一つであるが、ゲオルクにとっては、さらに別の意味を持った行為でもあった。というのも、彼は作業第1日目に彼女から借りていたお金をこのデートの直前に返し終え、テルチュカに対して、金銭的にも、また、心理的にも負い目のない言わば対等の立場をやっと回復したばかりだったのである(S.103)。上述したとおり、それまで彼女から有形無形

の援助を受ける一方であった彼が、今や、贈り物をして彼女を喜ばせることができるまでになったのである。すなわち、ゲオルクは与えられる側から与える側へ、その立場を逆転させたと言うことができるだろう。ゲオルクはテルチュカのことを初めて愛称で呼び、そして、愛の言葉を口にする。

「レージィ」と彼は言葉を続けた。彼が彼女のことをそう呼んだのはこれが初めてであった。おずおずと、震えながら、彼女の体に腕をまわして言った。「レージィ、君のことがたまらなく好きなんだ！」彼女はなにも答えなかった。しかし、顔を上げてこちらを見つめるその目を見たとき、彼には、テルチュカが波立つ幸福の海の中を漂っているように見えた。(S.109)

二人がショットヴィーンまで遠出をした日、村はちょうど教会開基祭でにぎわっていた。村中がきれいに着飾った人々で溢れ、通りにはたくさんの屋台が並んでいた。二人にとって、それは下界へやって来た解放感をより一層高めてくれるものであったことは確かだが、同時に、自分たちが属する世界とのあまりの違いに違和感を覚えたことでもあろう。テルチュカが、混雑を理由に、行き先を村の教会からマリア・シュッツ教会へ変更した(S.105)理由もそこに求められるだろう。そして、マリア・シュッツ教会でのミサも、礼拝にやって来た彼らを温かく迎えてくれるものではけっしてなかったのである。なぜなら、年老いた司祭は「不機嫌な顔つきで」、「おざなりの」ミサをささげ(S.106)、また、テルチュカたちがミサ後しばらく祈りをささげてから教会堂を後にしようとする、「扉のところにいた寺男はすでにイライラした様子で鍵をガチャガチャいわせていた」(S.107)のである。さらに、ミサの後、二人が近くの居酒屋の庭で誰にも煩わされないひとときを楽しんでいると、突然そこで金持ちの農民の結婚披露宴が始まり、二人は追い出されるように店を出ることになるのである。

しかし、二人はしだいに大勢の連中のなかで孤立し、重苦しく、いたたまれない気持ちになってきた。かなりの者たちが胡散臭い目で彼らの方をにらみ、「何の関係があって、あいつらここにいるんだ？」と問うような表情をしていた。とうとう、テルチュカがゲオルクの方を向いた。「さあ、もう行きましょうよ。あの人たちのお邪魔をしてるみたいだし。」(S.109)

現場監督が支配する荒んだ山の上の世界を逃れて、下界へと下りてきた二人であったが、彼らにとって、外の

世界もまたけっして居心地のよいものではなかった。こうして、ゲオルクとテルチュカが疎外感や孤独感をつのらせるなかで、二人の間の絆は、それだけ一層強まることになったのである。

物語の中でゲオルクと現場監督が直接言葉を交わす場面は合計5回ある。第1回目は、ゲオルクが初めて現場監督のもとを訪れ、自己紹介する場面である。そこで描かれているのは、ゲオルクのおどおどした態度と現場監督の威圧的な態度という対照的な姿である。たとえば、前者は、「その間に恐る恐る近づいてきた軍服の男」、「相手はおどおどしながら言った」、「手を震わせながら手渡した紙切れ」(S.91)といった表現に、後者は、「現場監督はばかにしたように言った」(S.91)、「彼は嚇すように手を動かしながら付け加えた。『毎日車2台分の碎石ができないと、お払い箱だぜ！ここは病院じゃないんだからな。』」(S.92)といった表現に見てとることができる。第2回目は翌日の昼食時である。現場監督は、新入りの労働者であるゲオルクも思うがままに搾取できる労働者の一人に仕立てあげるべく、巧みに誘惑する。この時彼が誘惑に利用するのが肉である。

彼はちょうど丸焼きにした大きな肉の塊を切り分けようとしているところだった。焼けた肉の香りが入って来る者たちの鼻を刺激し、おもわずゲオルクに溜め息をつかせたのだった。(S.99)

油がしたたり、じつに旨そうなこの豚肉がもつ抗いがたい魅力に対して、ゲオルクはテルチュカの警告を思い出しながら、必死になって抵抗する。前述のとおり、テルチュカの援護もあって、彼は、「持っている勇気をすべて奮い起こして」(S.100)、なんとか現場監督の誘惑をはねのけることができたのだった。3回目と4回目は、どちらも現場監督がゲオルクとテルチュカの仲を裂こうとする場面である。最初は、二人が一緒にいることを禁じ、禁が破られたと知るや、今度は、ゲオルクに解雇を言い渡す現場監督に対して、ゲオルクは何一つ言い返すこともできないでいる。

「この貧民、おまえと一緒にいなけりゃならない仲間のところへ、さっさと行くんだ！」そうして、彼は、命令するように手を突き出し、下の碎石場を指さした。ゲオルクがびっくりして何も言えずに命令に従っている間に […] (S.102)

と同時に、彼は後ろからゲオルクの首根っこをつかむと、二三歩先の地面に相手を叩きつけた。辺りには砂

と石が飛び散った。「バラスを下まで運ぶんだ、このろくでなしめ。それから、荷物をまとめて、出て行きやがれ! もう一度、俺の目の前をうろうろしようもんなら、こてんぱんに叩きのめしてくれるからな!」こう言いながら、彼はやっと起き上がった相手の男を手押し車の方へ押しやり、嚇すようにこぶしを振りかざしながら、さらに、斜面の下へと追い立てた。(S.110f.)

しかし、最後となる第5回目では、あきらかに最初から様相が異なっている。すなわち、それまでとは反対に、ここでおどおどした様子を見せるのはむしろ現場監督の方である。

彼は少しびっくりしたように二人の方を見た。(S.113)

「さあ、これが俺の答えさ。」とどもりながら彼は言った。(S.114)

現場監督の手は震えていた。(S.114)

彼はあえぎ、前に伸ばしたその手はせわしく宙をつかんでいた。(S.114)

現場監督が動揺の色を隠せないのは、彼にとっては予想外の言動に繰り返し曝されるからである。第一にテルチュカがゲオルクと行動を共にする決意を固めたことが分かったこと(S.113f.)、第二に「やつを捕まえて、たたき出せ!」という彼の命令に労働者が一人も従わなかったこと(S.115)、そして、第三に警察を呼ぶぞという彼の嚇しに対し、それを逆手にとる形で、これまでの彼の悪行を告発してやるとゲオルクに反撃されたこと(S.115f.)など、自らが支配していると思っていた連中からの思わぬ反乱に現場監督は驚き、うろたえるのである。小支配者として山上の世界に君臨してきた現場監督であったが、じつは怯懦な人間で、しょせん張子の虎に過ぎないということをテルチュカはすでに以前から見抜いていた。

「あいつにとっては、身近に、罰を受けずにいじめたり、虐待できるそんな無力で哀れな人間がいることが絶対不可欠なの。なぜって、あいつはよく激怒したり、怒り狂ったりするけど、ほんとうのところは臆病者なのよ。」(S.96)

「ほんとに時たま見回りに来るだけで、来たと思った

ら、毒づいたり、がみがみ言うだけ。もちろん、たいていの場合は、何も言い返す勇気のない連中に向かってね。」(S.97)

現場監督と対照的なのが、ゲオルクの泰然たる態度である。

「あいつなんか、怖くはない。」とゲオルクは答えた。(S.113)

彼の心は、揺るぎない力と自信に満ちあふれていた。(S.113)

「あなたは私を首にした。」とゲオルクは落ち着いた口調で返答した。「私が来たのは、自分の物を取りに来たのと、テルチュカも私と一緒に出て行くことを伝えるためです。」現場監督はゲオルクに飛びかかろうとするようなしぐさを見せた。しかし、目の前にいるゲオルクの覚悟を決めた、自信あふれる表情に、現場監督は心ならずも怯んでしまう自分を感じた。(S.113f.)

テルチュカが捕まったときも、ゲオルクは冷静さを失うことなく、屹然と解放を要求している。

しかし、すぐに彼は平静さを取り戻し、慌てる様子もなく肩から袋を下げ、ゆっくりとした足取りで現場監督の方に近づいてきた。「テルチュカを外へ出してもらいましょう。」と彼は落ち着いた口調で言った。(S.114)

こうして、おどおどしたゲオルクと威圧的な現場監督というそれまでの基本的構図は、泰然自若としたゲオルクとうろたえる現場監督という構図へとみごとに逆転しているのである。では、ゲオルクのこの落ち着きと自信は、いったいどこから来たのだろうか。それを探る手がかりとなるのが、第3章に頻出する、次のような彼の言葉であろう。

「君のことをつかまえておく権利も力もないってことに、あいつは気がつかないやらない。」(S.113)

「さあ、おとなしく、私のものを返してもらいましょう。」(S.115)

「あなたにはテルチュカを閉じ込めておく権利はない。」(S.115)



「そうなれば、誰が正しいか明らかになるでしょう！」  
(S.115)

もちろん、テルチュカへの強い愛情がそこに働いていることは言うを俟たないが、同時に、現場監督の不当な振る舞いに対し、自分こそが正しいこと、すなわち、正義を行っているという意識がゲオルクを動かしていることがわかる。それが彼の言動に見られる落ち着きと自信につながっているのである。そして、相手の言葉に逆上し、我を忘れて襲いかかってきた現場監督に対し、ゲオルクはまさに沈着冷静にこれを打ち倒すのである。ゲオルクによる現場監督の殺害は、たしかに形の上では自己防衛の結果ではあったが、心理的にみれば、それは「正義の執行者」とでもいうべき意識に基づいて行われた極めて積極的な行為であったと言えるだろう。

彼は、自分がまるで裁判官としてその職務を遂行したような、そんな気持ちになっていた。そして、自分がしたことの意味を充分自覚し、いまだその昂揚感に浸りながら、時折、優しく慰めるように彼女の頬を撫でていた。(S.116)

## V.

『碎石夫』は、前半部と後半部とで対照的なプロットを有する小説となっている。すなわち、前半部では、ゲオルクが半奴隷状態にあったテルチュカを養父のもとから解放するというプロットになっているのに対し、後半部になると二人の役割は逆転し、拘置所に収監され、裁きを待つ身となったゲオルクを今度はテルチュカが「救出する」ことになるのである。

現場監督を死に至らしめたゲオルクは、帰休兵の身ゆえに、軍法会議で裁かれることになり、ヴィーナー・ノイシュタットの軍の拘置所に移送される。一方、心配で居ても立ってもいられないテルチュカは、繰り返し歩哨に追い払われながらも、ただもう恋人に会いたい一心で、拘置所のある営舎の周囲をうろつくのだった。

しかし、夜、一日の仕事が終わった後や日曜、祭日には、彼女は拘置所のある営舎の周りを恐る恐る歩きながら、どこかにゲオルクの顔を見つけることができないかと、鉄格子がはめられ、ブラインドの下りた窓を一つ一つ見上げるのだった。もっとも、そんな彼女は歩哨たちに何度も怒鳴りつけられたり、追い払われたりする破目になった。途方に暮れた彼女は、とうとう門衛所の兵士たちを訪ね、ゲオルク・フーバーという

未決囚と話がしたいので、彼がどこにいるのか、教えてくれるよう彼らに頼んだ。しかし、果たせるかな、彼女は下卑た笑いと言げつないからかいの言葉を聞かされただけだった。(S.118)

それでも彼女は諦めることなく、今度は判事の家を訪れて、ゲオルクと面会させてもらえるよう切願するのであった。

家に行くと、判事殿はまだお休みですと告げられ、長い間廊下で待ってはいなくてはならなかった。もうすっかり身支度を整えた判事がやっとドアから出てきた。彼は非常に急いだ様子で、彼女の用件は何かと尋ねた。判事はテルチュカの言葉を途中でさえぎると、こう言った。勾留中の者との面会が許されるのは、じつに稀なケースに過ぎない。しかし、この件は近々判決が下されるであろうから、その点は心配するには及ばない、と。不安感を拭うこともほとんどできぬまま、彼女は帰途についた。(S.119)

こうして、恋人の身の上を案じるテルチュカを冷たくあしらう人間たちがいる一方で、その境遇に同情し、彼女に救いの手を差し伸べてくれる人間たちがこの小説には登場する。一人目は、ゲオルクを逮捕した地方警官である。彼はテルチュカに慰めの言葉をかけるとともに、ヴィーナー・ノイシュタットまで同行することを許してくれる。

一方で、悲しみに暮れるテルチュカに地方警官はこう言った。元気を出すんだ。私が聞いた内容から判断する限り、そんな酷いことにはならないだろうよ。なんと、彼はその上、自分とゲオルクをこれからヴィーナー・ノイシュタットまで運んでいく馬車の前部座席に彼女が同乗することを許してくれた。(S.117)

ヴィーナー・ノイシュタットに到着すると、地方警官はテルチュカがそこで生活できるよう世話をしてくれる。

哀れな娘は地方警官に宿を世話してもらい、また、早くも数日後には新築工事現場の仕事まで斡旋してもらったのである。(S.118)

二人目は、営舎の下士官である。彼は拘置所に収監されたゲオルクにテルチュカの来訪を伝えると約束してくれたばかりか、ゲオルクと面会するにはどうすればよいのか、二度にわたって助言してくれる。

ついに、ひとりの親切そうな下士官が彼女のことを気の毒に思い、問題の未決囚を探し出して、彼女が来たことを彼に伝えてやろうと言ってくれた。そして、下士官はこう言った。しかし、彼と会って話をするには許可できないんだよ。もっとも、判事から面会許可をもらえば、話は別だ。判事を訪ねてみるがいい。けれど、彼の家には朝早く行かなくてははいけないよ。昼間家で見かけることは滅多にない人だから。(S.118f.)

こうなったら、駐屯軍の司令官である大佐に頼んでみるよりほかに手はない、と彼[=下士官]は言った。大佐は少々厳しい人ではあるけれど、これまでもう大勢の人を助けてくれた方なんだ。(S.119)

三人目は、駐屯軍の司令官である大佐である。彼はテルチュカの話にじっくり耳を傾けた後、裁判が迅速かつ彼女にとって望ましい方向で決着をみるよう約束してくれるのであった。

彼[=大佐]は彼女に部屋へ入るように言うと、椅子に座り、彼女の申し立てをじっと聞いていた。それから、彼はいくつか彼女に質問をし、最後に、これまでのいきさつをすべて話してくれるよう求めたのだった。彼女は話し始めた。もちろん、その話しぶりは飾り気のない、拙いものではあったが、同時に、偽りのない真実のこもったものであったので、話を聞きながら、時折口ひげの先を軽くなでていた大佐は、あきらかに心を動かされた様子だった。彼女が話し終わると、彼は立ち上がり、相手の肩に優しく手を置いて言った。安心して立ち去るがいい。この件は、今から短期間のうちに、そして——これは私も望むところだが——ゲオルクにとってよい形で決着するよう、おまえさんに約束しよう。(S.119f.)

はたして大佐の約束どおり、ゲオルクは有罪とはなったものの、「きわめて特殊な事情」(S.120)が考慮され、長引いた勾留期間をもって服役したと見做すという温情判決が下されたのだった。さらに、釈放されたゲオルクとテルチュカのために、大佐は働き口の世話までしてくれる。こうして、ふたりはシュタイアマルク州エーレンハウゼンの線路番となり、二人の子供にも恵まれ、幸せな生活を送るのである。

## VI.

これまでおもに小説『碎石夫』のプロットを追いながらその特徴を論じてきたが、ここで、小説技法という観点から、あらためて本作品のもつ特徴について考察してみよう。

語りの構造という視点から、この小説を捉えたとき、まず特徴的なのは、物語にみられる反転の構造である。前二章で考察したとおり、反転は、ゲオルクと現場監督、ならびに、ゲオルクとテルチュカの両関係において生じている。前者においては、おどおどしたゲオルクと威圧的な現場監督という構図が泰然自若としたゲオルクというたえる現場監督という構図へと逆転していた。また、後者においては、二度にわたって反転が起きている。すなわち、弱々しいゲオルクと彼を支えるテルチュカという当初の構図は、ゲオルクが養父を打ち倒し、テルチュカを解放することによってまず反転し、さらに、拘束されたゲオルクが今度はテルチュカの必死の努力によって救い出されることで再反転しているのである。

反転の構造と密接に関連する形でこの小説を特徴付けているのは、物語を読む読者に作品が及ぼす二重のカタルシス効果である。第一のそれは、虐げられていた被抑圧者のゲオルクが抑圧者たる現場監督を打倒するといういわば革命的行為によってもたらされる。第二のそれは、ゲオルクを救済することになる純愛と慈愛がもたらすものである。言うまでもなく、純愛はゲオルクに対する恋人テルチュカの一途な愛、慈愛は弱者である主人公たちに大佐をはじめとする強者たちが寄せる同情心のことである。社会正義が実現されるとき、そして、愛が報いられるとき、人は大いなるカタルシスを感じずにはいないのである。

さらに、語りの手法上の特徴として、物語にみられる様々な象徴的表現を挙げることができる。一例が名前である。マリア・シュッツ教会は、先述したとおり、ゾンヴェントシュタイン山麓に実在する巡礼教会の名前であるが、物語の中では、ゲオルクとテルチュカのふたりが現場監督の目を逃れて出かける場所である点で、特別の意味をもった名称でもある。言うまでもなく、「マリア・シュッツ」とは、「聖母マリアのご加護」を意味する言葉だからである。ライナー・パースナーは、『碎石夫』を西洋の伝説や昔話にしばしば登場する竜退治の系譜につらなる小説の一つとしてとらえている<sup>2)</sup>。すなわち、山上の世界に君臨する現場監督が竜、彼のもとで束縛された日々を送るテルチュカが竜にさらわれた乙女である。したがって、現場監督=竜を倒し、テルチュカ=乙女を解放する人物がゲオルクという名前を持っているのは、

けっして偶然ではないということになる。なぜなら、十四救難聖人の一人である聖ゲオルクこそ、竜退治で有名な騎士の一人でもあるからである。また、情景描写においてもある種の象徴表現が見られる。パースナーも指摘していることだが<sup>3)</sup>、現場監督が君臨する世界では「暗さ」が、ゲオルクとテルチュカが愛をはぐくむ世界では「明るさ」が一つのメルクマールになっている。たとえば、前者に属するものとしては、現場監督の登場とともに暗闇がおとずれる第1章後半部の描写や竜の棲む洞窟をも連想させる作業小屋の中の穴ぐらなどが挙げられる一方、後者を代表する情景描写には、以下のようなものがある。一つ目は、ゲオルクとテルチュカの仲が次第に深まっていく様子を描いた部分であり、二つ目は、二人がショットヴィーンへ出かける日の様子を描いた部分からの引用である。

彼らは、毎朝ハンマーを肩に碎石場まで上り、そこで、よく晴れた、昼の長い日々を隣りあって過ごせるのが嬉しかった。(S.101f.) 【傍点筆者。以下同じ】

翌朝、テルチュカが教えてくれた険しい山道をゲオルクは下っていった。世界は明るい日の光の中で輝いていた。(S.104)

「明るさ」とならんで、恋人たちの愛の世界を象徴しているものに「静寂さ」がある。ゲオルクとテルチュカが「自分たち二人だけの憂いをもとにした親密な世界」に浸るとき、つねに強調されるのが、ふたりを包む「静寂さ」である。

外はひんやりとしていて、静かであった。あちこちから鳥のさえずりが聞こえてくるだけだった。(S.93)

辺り一面、動いているものは何もなかった。単調な槌音と啄木鳥の鳴き声だけが静寂の中に響いていた。(S.97)

しかし、だれもそこには腰掛けていなかった。ここにいるのは二人だけで、じつに静かだった。(S.107)

「明るさ」と「静寂さ」がともに深く係わっているのが、自然である。ゲオルクとテルチュカの二人にとって、自然こそが彼らの癒しの場となっていたことを物語は示している。病気で弱ったゲオルクの身体を再び元気にしてくれたのは、清々しい山の空気であった(S.101)。しかし、それだけではない。現場監督の苛めに遭いながら、

まわりの粗野な労働者たちにも馴染めず、いっぽう、村人たちからも露骨によそ者扱いされるアウトサイダーの二人が、誰にも邪魔されることなく、自分たちだけの世界を築いて、心の安らぎを得ることができたのが、ほかならぬ明るく、静かな自然の中だったのである。

## VII.

一般にベシミスティックな色合いの濃いザール文学にあって、ハッピーエンドに終わる小説『碎石夫』は例外的な位置を占めている。ヘルベルト・クラウザーは、ザール文学に関する彼の概説書の中で、以下のように述べている。

ザールの作品に支配的なのは、生のあらゆる領域に現れる無常のモチーフ、しきりに繰り返される死の想念、そして、一貫した断念と諦念の姿勢である。彼の文学作品においてたびたびテーマとなっている愛が歓びと幸せをもたらすことは稀である。愛はしばしば死へと接近する。全作品を貫くライトモチーフは、エロスとタナトスである。<sup>4)</sup>

こうした点を踏まえて、改めて小説を読んでみると、物語の中には批判的な自己言及と取れなくもない箇所が存在していることがわかる。それは、若い頃恋人に裏切られるという経験をしたために、愛というものに強い不信任感を抱いていた大佐が、ゲオルクとテルチュカの二人と出会うまで、公言して憚らなかったという次のような言葉である。「愛などというものは、ばかげた文学者の小説ならばいざ知らず、現実の人生においては、けっしてお目にかかることはない。」(S.122) さらに、見方によれば、この小説はある意味で不完全なものに終わっているとさえ言えなくもない。というのも、物語が幸福な結末を迎える以上、小説第1章に述べられている「この世の大きな悲劇が、形こそ小さいものの、至るところで起きていることを示す」(S.88) という語りの意図がはたして充分達成されているのか、少なからず疑問が残るからである。

ではなぜ、このようなある種の「不整合性」を内包しつつも、『碎石夫』執筆にあたって、ザールはハッピーエンドに終わる恋愛小説という形を選択したのであろうか。その答えは、小説の初版に付された献詞から読み取ることができる。

貧しさを知っているあなた／飢える苦しみを知っているあなた／自ら体験したことはなくとも／目で見／心

で感じ／人の窮状を受けとめて／何千分の一にも軽いものにしてくれる。／そして、あなたは／人の役に立つとなれば／ペリカンのように／胸を開いて／自らの／温かな血で／飢えた人を元気づけてくれる。／そんなあなたに、この小さな本を捧げます。／人が苦しみ／人が悩み／人が耐える姿を／描いたこの小さな本を。／本は／それらすべてを／知りぬいた／一人の詩人が書いたもの。<sup>5)</sup>

## 使用テキスト

Ferdinand von Saar: *Novellen aus Österreich. Band 1.* Wien u.a. (Deuticke) 1998.

## 註

- 1) Vgl. Karl Konrad Polheim (Hrsg.): *Ferdinand von Saar. Ein Wegbereiter der literarischen Moderne.* Bonn (Bouvier) 1985.
- 2) Rainer Baasner: *Happy-End trotz Schopenhauer oder Das Glück eines armen Soldaten. Ferdinand von Saars Die Steinklopfer.* In: Polheim (Hrsg.): a.a.O. S.57ff.
- 3) Vgl. Baasner: a.a.O. S.54f.
- 4) Herbert Klauser: *Ein Poet aus Österreich. Ferdinand von Saar—Leben und Werk.* Wien (Literas) 1995, S.5.
- 5) Ferdinand von Saar: *Ferdinand von Saars sämtliche Werke in 12 Bänden. Band 2.* Hrsg. von Jakob Minor. Leipzig (Max Hesse) o.J. [1908], S.149f.
- 6) Vgl. Klauser: a.a.O. S.33ff.
- 7) Vgl. 山之内克子『ウィーン・ブルジョアの時代から世紀末へ』講談社 1995年、190ページ。

## 主な参考文献

- Wolfgang Kos: *Über den Semmering. Kulturgeschichte einer künstlichen Landschaft.* Wien (Edition Tusch) 1991.
- Richard Bamberger u.a. (Hrsg.): *Österreich Lexikon in 2 Bänden.* Wien (Verlagsgemeinschaft Österreich-Lexikon) 1995.

(平成17年6月27日受付)

「あなた」とは、ヨゼフィーネ・フォン・ヴェルトハイムシュタイン (Josephine von Wertheimstein, 1820–1881) のことである。銀行家レーオポルト・フォン・ヴェルトハイムシュタインの妻であった彼女は、著名な芸術家や文化人が多数出入りしていたサロンを主催する一方、貧困家庭の子供たちを受け入れる幼稚園の建設など、さまざまな社会福祉事業にも力を注いだ女性であった<sup>6)</sup>。ザールがヴェルトハイムシュタイン夫人と知り合ったのは1870年のことであった。それは、作家にとって、まさに物心両面において大きな意味をもつ出会いであった。ヴェルトハイムシュタイン夫人は、以後ザールのパトロンとして、溜まっていた彼の借金まで肩代わりしてくれるなど、経済的支援を惜しまなかった。また、当時その質の高さにおいて他を凌駕していたと言われる夫人のサロン<sup>7)</sup> に出入りを許されたことで、ザールは作家としての人生を本格的に歩み出すことができたのだった。

こうして、慈善家であり、個人的な恩人でもあったヴェルトハイムシュタイン夫人に対し、作品を通して謝意を表明することが、ザールにとって、小説『碎石夫』を執筆した主要な動機の一つであったのである。したがって、然るべき地位にある者の慈愛によって弱者に幸福がもたらされるというプロットがそこで選択されているのは、少しも不思議なことではないのである。